

令和 3 年 6 月 4 日現在

機関番号：32601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2020

課題番号：16K03057

研究課題名(和文) 近世後期における砂糖業の展開と地域経済

研究課題名(英文) Development of sugar industry and regional economic in the Edo Period latter period

研究代表者

落合 功(OCHIAI, KO)

青山学院大学・経済学部・教授

研究者番号：10309619

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：近世から現在に至るまで日本国内で砂糖を生産する意味を考えた。砂糖は、私たちの生活にとって身近な調味料の一つだが、江戸時代初頭は薬種の一つとして扱われ、ほとんど輸入していた。それが江戸時代後期になると和菓子に含まれるようになり、相当量が国内で生産されるようになる。それは黒砂糖のみならず、白砂糖もそうであった。この砂糖国産化におけるキーワードが国益である。この国益思想は、単に砂糖生産を促進するだけでなく商品作物の生産を促進し、これまでの五穀中心の生産からの変化をもたらすことになる。また、奄美大島(黒砂糖)や徳島(三盆糖)における砂糖生産者から聞き取りを行い、砂糖生産の現状をうかがった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「国益」という概念は古いが、江戸時代後期に登場した言葉である。江戸時代前期は、米や五穀生産(大麦、大豆、小麦、粟、稗、小豆など)が中心であったが、輸入防遏(国益)をスローガンとすることで、輸入品の国産化が推進される。その重要物資が砂糖であった。幕末までに、黒砂糖はほとんど国内産で賄われ、白砂糖もおおよそ生産されるようになる。近世の場合、「国益」の範囲は日本、幕藩制国家、藩、国郡制の国など多様であった。そして、こうした発想は、幕藩体制の地殻変動を招くこととなり、幕藩制社会を揺るがすことにもつながった。

研究成果の概要(英文)：The meaning to product sugar in the country is considered from Edo period to present. Sugar is the close seasoning for us. Most sugar was imported in the Edo Period first term. A considerable trade started to be produced in country in the Edo Period latter period. White sugar as well as brown sugar are also so for this tendency. Key words of this sugar domestic development are national interests. This thought of national interests was also brought to whole commercial crop as well as sugar production. A change from production in the former cereal center was brought. I heard from a sugar producer in Amami-oshima (brown sugar) and Tokushima (three tray sugar). I heard the current state of the sugar production.

研究分野：日本社会経済史

キーワード：国益 奄美大島 阿波三盆糖 池上太郎左衛門 国産化

1. 研究開始当初の背景

現在、黒砂糖の産地は南西諸島(奄美諸島や沖縄)、三盆砂糖の産地は香川県、徳島県に限られている。そして、我々が消費する砂糖の多くは海外からの輸入に依存している。しかし、奄美諸島の黒砂糖と四国(徳島県、香川県)の和三盆糖はいずれも精製糖とは性格を異にした固有の性格を有しつつ現在に至るまで続けている。第一次産業が産地として存続し続けられる要因について、砂糖(サトウキビ)生産が今日まで続いた要因から探ることを目的とする。

この点について、産地の様子をヒアリングで調査するとともに、日本の砂糖生産の原点である近世中後期の和製砂糖生産に注目して検討することにしたが、その際、サトウキビ生産者は高齢化が進んでおり、早急にヒアリングを行うことが求められていた。また、和製砂糖生産を推進し幕府が奨励するキーワードとして国益が挙げられるが、この国益思想が近世社会、地域経済に与えた影響についても考える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本における砂糖業の原点ともいえる、近世に展開した砂糖国産化の問題について、これまでの研究成果を再整理する。そして、砂糖国産化を推進する理念として国益思想の関係を明らかにする。また、この国益思想は単に砂糖国産化の問題にとどまらず、近世社会にも影響を与えたことを明らかにする。

その上で、砂糖業の歴史の全体像を展望していきたい。

3. 研究の方法

(1) 現在も産地である奄美大島(主として徳之島、喜界島)徳島における現地でのヒアリング調査を実施し、現在の黒砂糖生産、精製糖生産、徳島和三盆生産の動向について検討する。

(2) 砂糖業について、各地の調査を進める。中四国地方と奄美地方、沖縄県などを中心に史料所在調査、および具体的な史料調査を行う。

(3) 諸産業との関りから、近世後期から近代にかけて展開した諸産業の動向を明らかにし、砂糖業との相違点を検討する。

(4) 国益思想については、18世紀中ごろから文言として登場することに注目し、和製砂糖を推進し、また砂糖国産化を「国益」として表現した池上太郎左衛門に注目する。そして、この大師河原村の名主である池上太郎左衛門が「国益」という文言を使うようになる背景を明らかにしたい。

4. 研究成果

この科学研究費によって、様々な調査や検討が進み多くの成果が得られたが、箇条書きで以下の4点にまとめる。特に本研究期間中に刊行した、拙著『国益思想の源流』(同成社)を中心に紹介する。

(1) 砂糖国産化は近世中後期に輸入防遏を主眼として実施されたものである。この点は、これまでの研究史の通りだが、その担い手である池上幸豊(太郎左衛門)の動向に注目すると、村落上層農民レベルでも砂糖国産化が国益という認識であったことが判明する。また、砂糖国産化は池上幸豊一人が取り組んでいたわけではなく、そしてその背景には成島道筑や田沼意次(井上寛司)、田村藍水などの影響があったことがわかる。

当時、砂糖は薬種として扱われており、砂糖の国産化の取り組みは、本草学者を中心とした多くの人々によって取り組まれていた。田村藍水もその一人であった。田村藍水は、高麗人参の普及にも努めた人物として知られ、その弟子平賀源内と共に薬品会を開催するなど、当時の本草学の第一人者であった。池上幸豊は平賀源内とも交流があり、砂糖生産(甘蔗=サトウキビ、もちろん砂糖製法)のことだけではなく、芒硝など多くの知見を得ている。その意味で、地域の殖産などがこの時期から始まったといえるだろう。

同様に、国学者である成島道筑との付き合いも深かった。成島道筑は將軍徳川吉宗に書物の講義をすると共に奥坊主として務めた。近隣の川崎宿名主の田中丘隅が著した『民間省要』を徳川吉宗に紹介している。末娘のこうは池上幸豊の義理の娘になっている。また、冷泉家の和歌を関東でも吸収するため、道筑は冷泉家の下に入門するが、池上幸豊もそのつながりで和歌の会に入門している。この和歌の門人帳を見ると、他にも田沼意次や池上幸豊が砂糖植付を行う際に支援した磯野政武などの名前も見る事ができる。

また、時の権力者であった田沼意次との関係だが、直接的に面談する機会は多くないが、その間を取り持つ井上寛司との付き合いにより、砂糖国産化の一翼を村役人層(農民)が担うこ

ととなっている。具体的には、池上太郎左衛門は井上寛司から砂糖国産化に向けて代官の許可や、触書など多面的な協力を得ている。また、訴願において「国益」を含めるように池上幸豊に指示したのも井上寛司であった。このように、村役人層が、時の政権（権力者）や学者などとも結びつくことで砂糖国産化という国家的な課題に応えることができたということである。そして、かかる身分を超えた結びつきがあったのが宝暦・天明期の社会の特質であるともいえるだろう。

（２）砂糖国産化の流れを検討すると、徳川吉宗の享保改革で推進された実学の影響が大きいことがわかる。そして、その影響は、田沼政権期に及ぶこととなる。この点、田沼意次の父意行の紀州系家臣団（吉宗が將軍となった段階で紀州藩から連れてきた）であることが判明する。田沼意行は、吉宗の指示のもと、冷泉家の和歌にも関係を持つことになる。この冷泉家の和歌の関係は田沼意次だけでなく池上幸豊なども入門しており、そのネットワークは注目できることである。このように、田沼政権期の特色として指摘される商業政策や殖産政策は、徳川吉宗政権期の影響を引き継いでいることが明らかとなる。

（３）国益思想は、近世前期の幕藩権力が経済政策基調としていた五穀中心生産だけでなく、商品作物を推進する経済政策基調を容認することとなった。これは、幕藩制社会の根本である検地により耕地を掌握し、米穀年貢を収納することを基礎にした封建的社会的根底を揺るがすことを意味している。つまり、耕地は基本的に米穀を生産する場であり、他は塩田や林野など限定した利用しか認められていなかったが、それを「土地をより有益に利用する」ことを認めることで、海面に近い痩せ地には木綿など、商品作物育成の適地に植栽されることができるようになったのである。そして、それは単に生産者（農民）だけではなく、財政窮乏で悩んでいた諸藩の経済政策（財政政策）の柱になっていく。

実際、その後、国益思想は藩において、藩札を発行することで資金とし、殖産興業政策を推進することとなる。その結果、諸商品の生産が推進され現銀化し藩財政を好転させることとなった。その意味で、藩札発行の殖産興業政策は一面的には成功するが、巨額の藩札発行により、金融危機を招く藩も見られている。

（４）そしてヒアリングの成果を紹介しておく。精製糖生産については徳之島（南西糖業株式会社）黒砂糖生産については喜界島（各黒糖製糖所）そして和三盆糖については徳島（岡田製糖所）でヒアリングを実施した。ヒアリングの成果は必ずしも論文としてではないが、「調査報告」として活字化している。その意味では十分な成果とは言えないかもしれない。ただ、そこでの話は、南西諸島においてはサトウキビ生産は台風などの自然災害の影響を受けながら、島嶼経済を維持し続ける上で重要な産業であること。黒砂糖生産は伝統的な産業として島嶼地域に根付いていること。また、徳島和三盆糖も、品質的には世界的にも優れた評価が得られ、ブランドとして確立していることなどが具体的に判明した。しかし、他方で、サトウキビ生産（黒砂糖生産を含む）は、海外から輸入の競争のもと資本集約型農業が迫られ、結果、過疎化が促進され、地域が成り立たなくなってきたことも判明した。つまり、生産性の向上は経済発展として指摘されることだが、それが地域の存続とは必ずしも一致しないということである。また、和三盆糖についても、京都の和菓子など高級菓子に使われるが、砂糖自体はどうしても原料ということで、安いザラメ糖（精製糖）を使用する機会が多いとのことである。そうしたことから、高品質であったとしても需要が満たされないという問題を招いている。かかる課題は、すぐに解決できる問題ではないが、今後も研究を推進し続けるに当り意識していく新たな問題として得られた成果である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 落合 功	4. 巻 12
2. 論文標題 中国における改革開放後の日系企業と現在	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 経済研究（青山学院大学経済研究所）	6. 最初と最後の頁 223-232
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 落合 功	4. 巻 305
2. 論文標題 近世後期における塩業経営者のネットワーク	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 史学研究	6. 最初と最後の頁 129-149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 落合 功	4. 巻 71-4
2. 論文標題 南西諸島における黒糖製造	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 青山経済論集	6. 最初と最後の頁 89-134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 落合 功	4. 巻 71-3
2. 論文標題 復興期における中小企業金融	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 青山経済論集	6. 最初と最後の頁 117-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 落合 功	4. 巻 71-2
2. 論文標題 徳之島製糖業の展開と南西糖業株式会社	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 青山経済論集	6. 最初と最後の頁 141-170
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 落合 功	4. 巻 70-3
2. 論文標題 奄美信用組合の展開と現在	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 青山経済論集	6. 最初と最後の頁 85-101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 落合 功	4. 巻 10
2. 論文標題 砂糖国産化和国家利益思想	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 経済研究	6. 最初と最後の頁 145-163
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 落合 功	4. 巻 69-3
2. 論文標題 信用組合理念の形成	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 青山経済論集	6. 最初と最後の頁 135 - 156
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 落合 功	4. 巻 35
2. 論文標題 近現代における製塩業と製糖業	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本塩業の研究	6. 最初と最後の頁 71 - 82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 落合功	4. 巻 第9号
2. 論文標題 The industrial history of salt and sugar	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『経済研究』(青山学院大学経済学会)	6. 最初と最後の頁 201 - 210
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計3件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 落合 功
2. 発表標題 砂糖国産化と国益思想
3. 学会等名 第五回日本学ハイエンドフォーラム東アジアの視点から見る中日経済の合作と展望国際シンポジウム 於山東師範大学
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 落合功
2. 発表標題 国益思想の源流
3. 学会等名 日本経済思想史学会例会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 落合功
2. 発表標題 近世後期広島藩の經濟政策思想
3. 学会等名 日本經濟思想史学会大会報告
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 落合 功	4. 発行年 2018年
2. 出版社 すいれん舎	5. 総ページ数 91
3. 書名 信用組合のルーツをたどる	

1. 著者名 落合功	4. 発行年 2016年
2. 出版社 同成社	5. 総ページ数 176
3. 書名 国益思想の源流	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>青山学院大学経済学部落合功研究室 http://www.ochiai-lab.com/index.html 青山学院大学研究者情報 http://raweb1.jm.aoyama.ac.jp/aguhp/KgApp?kyoinId=ymiigyymggy</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------